

気候文明史

世界を変えた8万年の攻防



タイトル	「気候文明史」 - 世界を変えた8万年の攻防 -
著者	田家 康
出版社	日本経済新聞出版社
発売日	2010年2月20日
ページ数	336p

著者は、気象予報士であり、元農林中央金庫の森林部門担当部長を務めたというユニークな経歴の持ち主です。また、気候学に関する知識や見識は専門家以上のレベルであり、資料や学説、仮説の纏め方、構成、記述方法等が非常に明快で、読みやすい構成になっています。

早速、エピローグを覗くと、『8万年前にアフリカ大陸から紅海を渡って全世界に移住した人類は、激しい気候変動の中で「氷河時代の子」として知能を発達させてきた。人類は気候変動への適応力あるいは順応力に優れていたことで地球を席卷してきた。

最終氷期が終わった後も、何度もあった寒冷化のインパクトにより文明が崩壊したかにみえたが、その都度危機を克服し、強固な社会経済組織を打ち立ててきた。

しかし、現在は今までとは全く異なるステージにあるように思える。一つには、60万年の変動サイクルを突き抜けてしまった大気中の温暖効果ガス濃度の上昇がある。ブロッカーがいうように、間氷期以降で気候変動の不確実性は最も高まっているとみていい。今まで人類が経験してきた寒冷化のインパクトではなく、地球規模での急激な温暖化という、文明が初めて経験するような環境変化が起きる可能性がある。

さらに、67億人を超える世界人口の急激な増加がある。最終氷期の時代から、人類は気候変動に対して生活圏を移動することで対処してきた。しかし、地球上で人類が満杯になり、さらに毎年8千万人ずつ増加している中では、これまでのように移住という解決策は採れない。あるいは科学技術の進歩が、地球規模での人口過密という現在の脆弱性を補うだけの切り札になるかも知れないが、これも楽観視することが出来ない。』とあります。

さて、本書では、8万年の気候変動と人類の進化を含めた歴史を網羅的に解説しています。8万年というのはアフリカから現生人類が世界に移動、拡散したとされる時

期です。構成は、大きく3部に分けられ、エピローグ、巻末解説一、二と続きます。
部ごとの構成は以下の通りです。

第1部 黎明編:気候変動が人類を育てた。

第1章 気候変動との闘いの始まり

第2章 寒冷な気候の中で

第3章 最終氷期の終わりと言ガードリアス・イベント

第4章 「長い夏」の到来

第2部 古代編:気候変動が文明を生んだ

第1章 長い夏の終わりと古代文明の勃興

第2章 繰り返される寒冷化、突然の干ばつ

第3章 、では地球気候の変動する要因、氷河理論、寒冷期、農耕・文明発生仮説、温暖化、太陽活動等の影響解説。

第3部 中世・近世編:気候変動が歴史を動かした

第1章 中世温暖期の繁栄

第2章 寒冷な時代の到来

第3章 小氷河期の気候と歴史

エピローグ:気候変動との闘いは続く

エピローグと巻末解説で現在までに判っている事実、気象理論、地質学、地球物理学仮説含め幅広い解説があります。

これを読めば気候の事がすべて判るというほど広範な関連事項の解説があります。ところが、本書を読み進めていくと、人類の発展から文明、歴史の興亡まで、すべてが気候の所為であるといっているようにも思えますが、ある意味で「気候を扱った書物」や「歴史を扱った書物」にはない新しい視点を提供しているようで、読んでいて「ああこういう視点で物事を見ると面白いな」という個所が随所に見られます。学者によっては、気候変動はあくまで「補助的なもの、あるいは結果的に促進したかもしれない程度だろう」との抑制の効いた解説もあります。この辺りも念頭において読み進めると更に楽しみながら読むことが出来るでしょう。



ブロッカー博士のコンベア・ベルト

- ・ 古気候学者で熱塩循環の考えをヤンガードリアス・イベントと結びつけたウォレス・ブロッカーが、あのハリウッド映画「デイ・アフター・トゥモロー」の主人公である気候学者のジャック・ホールモデルだったとは！
- ・ アイスマンが示した氷河の拡大！
- ・ 大学で数学を学び、電気力学の研究者のギルバート・ウォーカーの

「南方振動」や「北大西洋振動」の発見！

・ ストンサークルの建造の目的は、「日時計」あるいは太陽や星の動きを調べるための古代の「天体観測所」だったとされていますが、今日ではストーンサークルが密集するブリテン島では年間を通して晴れの日が少ない地域なのに何故これらがこの地に建造されたのか？

- ・ IPCC第4次評価報告書は過小評価なのか？
- ・ フランス革命はなぜ1789年に起きたのか？
- ・ ナポレオン軍の遠征は何故失敗したのか？
- ・ 魔女狩りはなぜアルプス以北で流行したのか。

などなど、気候変動に関連した面白い話題も豊富です。

少し気になるのは、古気候学の第一人者のウォレス・ブロッカーが「ネイチャー」の解説記事で、「自分自身が多くの人に緩やか温暖化というイメージを植え付けてしまったことを後悔している。ゆっくりと気候変動は起きるかもしれない。しかし、突然、劇的に気候が変動する可能性も同じくらいある。我々は気候でロシアン・ルーレットを行っているのだ。将来に不愉快な驚き起きないように希望している。けれども、私は多くの人よりも楽観的ではいられない」と心境を語っていますが、本書を読むと「そうかも知れないな」と思わせるものがあります。というのも、ブロッカーの危惧は、IPCCのシミュレーションが予想するリスクとはまた別の次元の話だからです。

本書は、仮説も多く、実に多様な資料や研究成果が引用されており、読み応えのある一冊です。著者は、「近い将来か遠い未来かは判らないが、必ず気候の激変はやってくる。その時、人類は今まで歩んできたような適応力を駆使して気候変動の危機を克服し、より強固な文明社会を築くことが出来るであろうか」という言葉で本書を閉じています。

なお本書は、日本列島の気候についても詳しい解説があり、「日本列島の気候文明

史」という表題で新書版にまとめられてもよいほど内容が豊富です。これから気候学を勉強しようとしている若い諸君にはお薦めの書です。

2010.4.10
